

3 畦状遺構

石川県内では、耕地とみられるこの種の遺構は、扇状地を中心として段丘部や砂丘で多く検出され、時期は古代～近代と幅広い。一方、大和盆地や山城乙訓郡の例では、中世に入ってから低地を中心として出現・急増することから、「中世素掘り小溝」(今尾1981),「中世小溝群」(山中1988)などと呼称され、水田裏作のウネ跡(今尾1981),水田における夏期の畑作跡(八尾1986)という意見がある。乙訓群の例では、M類とされる条里型地割の長地の $\frac{1}{2}$ にあたる5.5mを基本単位とするものと、それより狭い間隔のS類があって、それぞれ桂川の氾濫原、下位段丘・扇状地と立地に対応することやその他のことなどから、前者を水田畦畔に伴うもの、後者を畑作の畝造成に伴うものとしている(山中1988)。新潟県子安遺跡や一之口遺跡の例では、群馬県の例や立地などから畠と推定し、建物群を伴うことから「園宅地」の実例ではないかとみられている。更に、この種の遺構が9世紀前半～10世紀前半に多くみられることから、遺跡分布のあり方ともあわせて、平安初期～中期を開発史上の大画期と評価している(坂井1986)点は重要である。

本遺跡の例は、扇状地扇央部という立地や微地形(第9図)、溝間距離、小ピット群のあり方などから「畠」とするのが消極的根拠ながら最も妥当と言えよう。溝間距離は、1.7m前後が平均的であるが、同様の立地にある松任市上二口遺跡(中島1982)や辰口町辰口西部遺跡群(北野ほか1988)でも1.6～1.8m前後が主体で、その数字には一定の統一性がある。畝の単位は4本で長8m前後を想定したが、前記2遺跡では、長さは長いものはあるが、最小単位としての畝列を3～5本程度と捉えられる例が多い。畝状遺構と建物群の関係については、調査区の中では明らかにできなかったが、「畠」が一定の土地区画の中に計画的に造成された可能性は認められる。手取川扇地上での畝状遺構の初現は、今のところ8世紀後半で、東大寺領幡生庄の推定地、辰口西部遺跡群において確認でき、上二口遺跡や本遺跡の例もそれを前後する時期におさまる。坂井氏が指摘するように、集落分布と同様、開発の進捗状況を示すものとして興味深い。

耕作関連の遺構にはその他、時期は下るが、沖積地や扇端の地下水自噴地帯などで、1m前後の幅広の溝を伴う例(戸水C遺跡、北安江遺跡、八田中遺跡)があり、また水田の湛水防止や土壤酸化・活性化の溝切りの例の存在も予想されることから、個別の立地や形態を踏まえた性格付けが必要である。畝状遺構は、溝の掘削方法(農具)や水田・建物群との関係、栽培植物などを明らかにしていくことによって、当時の農業経済の一端を解明する上で好資料となろう。

引用文献

- 今尾文昭 1981 「『中世』素掘り小溝についての一解釈」『青陵』 奈良県立橿原考古学研究所
八尾博之 1986 「中近世素掘り小溝について」『矢部遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所
山中 章 1988 「長岡京廃都以後の土地利用(下)」『研究紀要』第3号 向日市文化資料館
坂井秀弥 1986 「畝状小溝」「上越市春日・木田地区発掘調査報告書 一之口遺跡西地区」 新潟県教育委員会
北野博司ほか 1988 「辰口西部遺跡群Ⅰ」 石川県立埋蔵文化財センター
中島俊一 1982 「松任市上二口遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター